

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年4月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ火口付近では、2025年9月12日から観測されている火口方向が上がる傾斜変動が緩やかに続いており、火口付近浅部は引き続き膨張した状態と考えられます。また、96-1火口の噴煙活動は活発な状態が続いています。

火山活動の高まった状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図2、図3-①、図7-①②⑤、図8-①③、図10-①～⑥）

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の量の増加した状態が続いています。今期間も最高で火口縁上500mまで上がるなど、引き続き活発な状況です。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では100m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では200m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

・火山ガスの状況（図3-②）

機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）が14日及び15日に雌阿寒岳山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり約300トンで、気象庁が実施した前回の観測（3月9日、1日あたり300トン）と同程度でした。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図8-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられ、その後も緩やかな減少傾向が続いています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループのデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年5月分）は令和8年6月8日に発表する予定です。

・地震及び微動の発生状況（図3-④⑤、図4～6、図7-④⑦、図10-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、2025年9月中旬に回数が増加したのち、次第に減少して2月中旬以降は概ね少ない状態で経過しています。

29日11時40分頃から、振幅が小さく継続時間の短い火山性微動を観測しました。この火山性微動の前後で地震活動の状況に特段の変化は認められませんでした。

震源はポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ0 km付近、中マチネシリ火口付近の深さ0～1 km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図3-③⑥、図5、図7-③⑥⑧、図9、図11）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日以降、火口方向が上がる傾向の緩やかな変動が継続しており、ポンマチネシリ火口浅部は膨張した状態と考えられます。

GNSS連続観測によると、主に東側山麓の観測点で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長が観測されています。

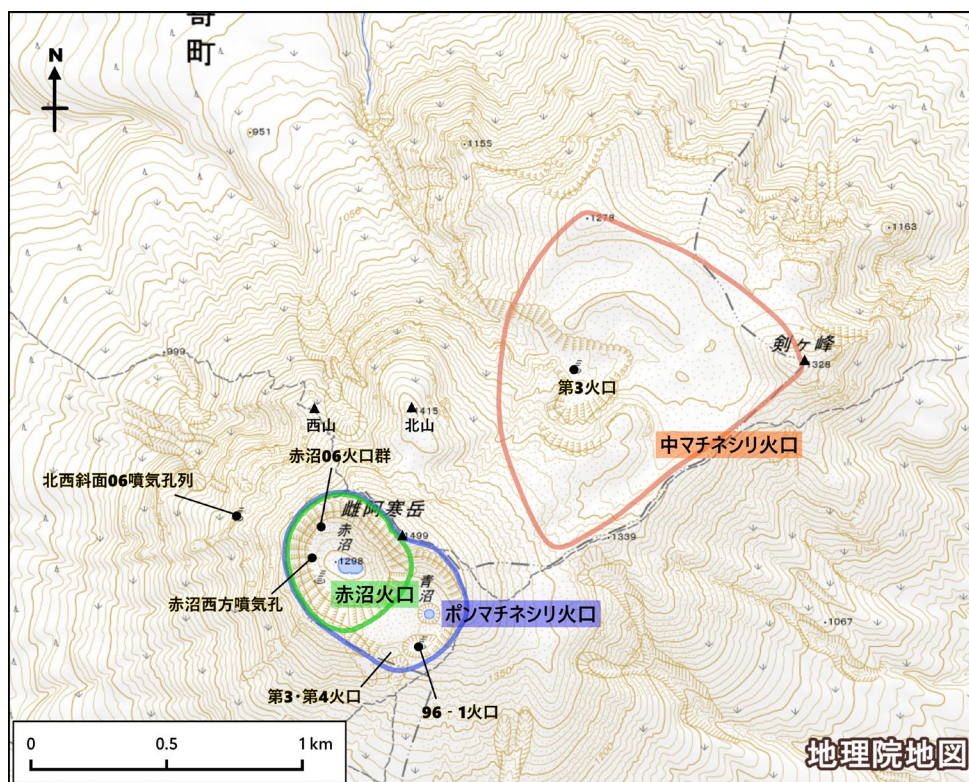


図1 雌阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。



図2 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

上：上徹別^{かみてしべつ}監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）

下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

・ 96-1火口の噴煙は、2025年9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。

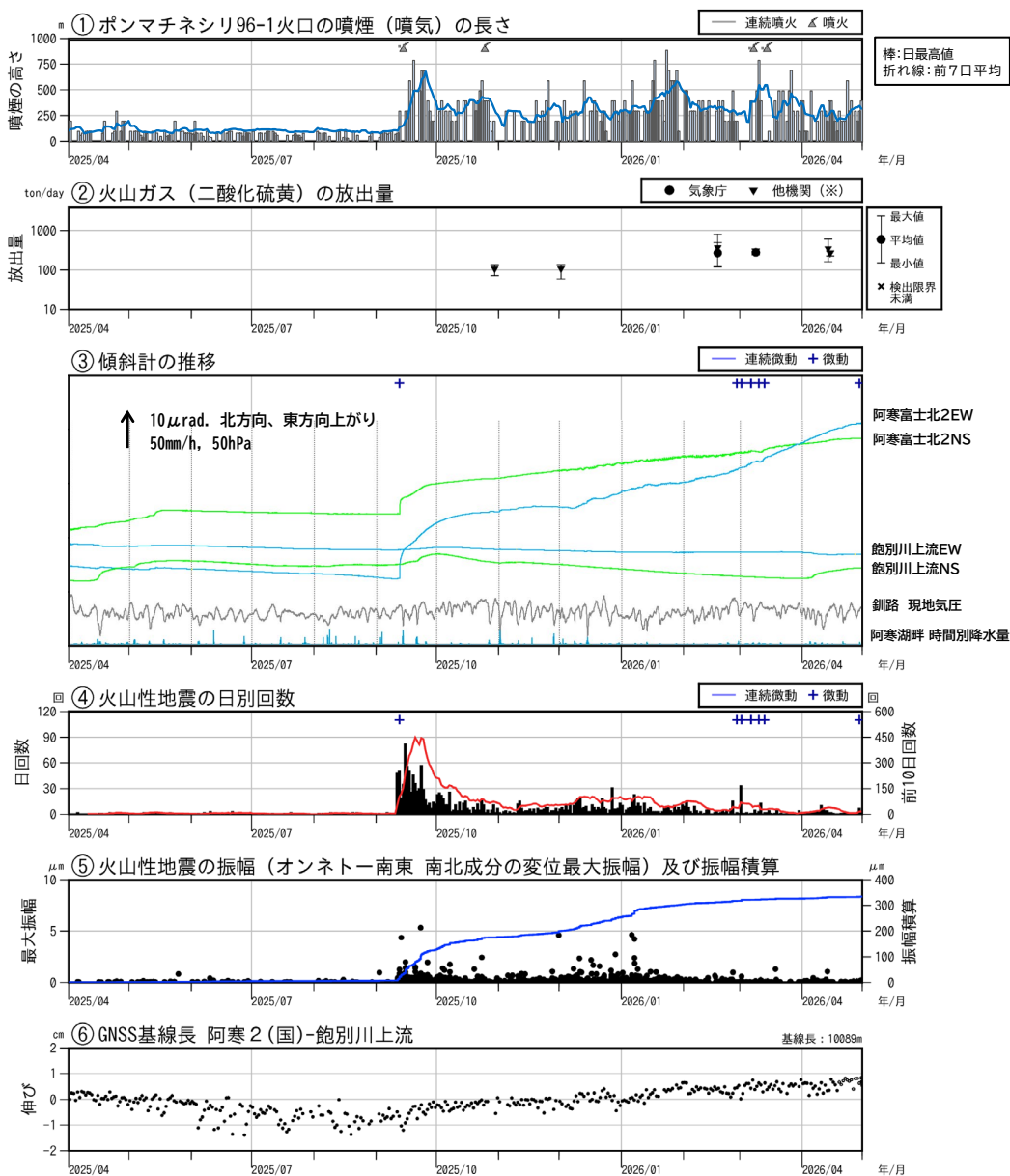


図3 雌阿寒岳 短期の火山活動経過図（2025年4月～2026年4月）

- ・①の噴気の長さについては図8の説明図を参照ください。
- ・②他機関（※）は北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測を示します。
- ・③の傾斜計データは降水や気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めています（図6参照）。
- ・3月16日以降、噴火は観測されていません。
- ・4月14日、15日に機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）が実施した現地観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり約300トンと、気象庁が実施した前回の観測（3月9日、1日あたり300トン）と同程度でした。
- ・2025年9月12日の火山性微動に伴って阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、以降、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は活発となっています。10月頃以降も阿寒富士北2観測点で緩やかな火口方向上りの傾斜変動が続いており、12月頃から変動方向にわずかな変化がみられています。
- ・火山性地震は、2025年9月中旬に増加して以降次第に減少し、2月中旬以降は概ね少ない状態で経過しています。

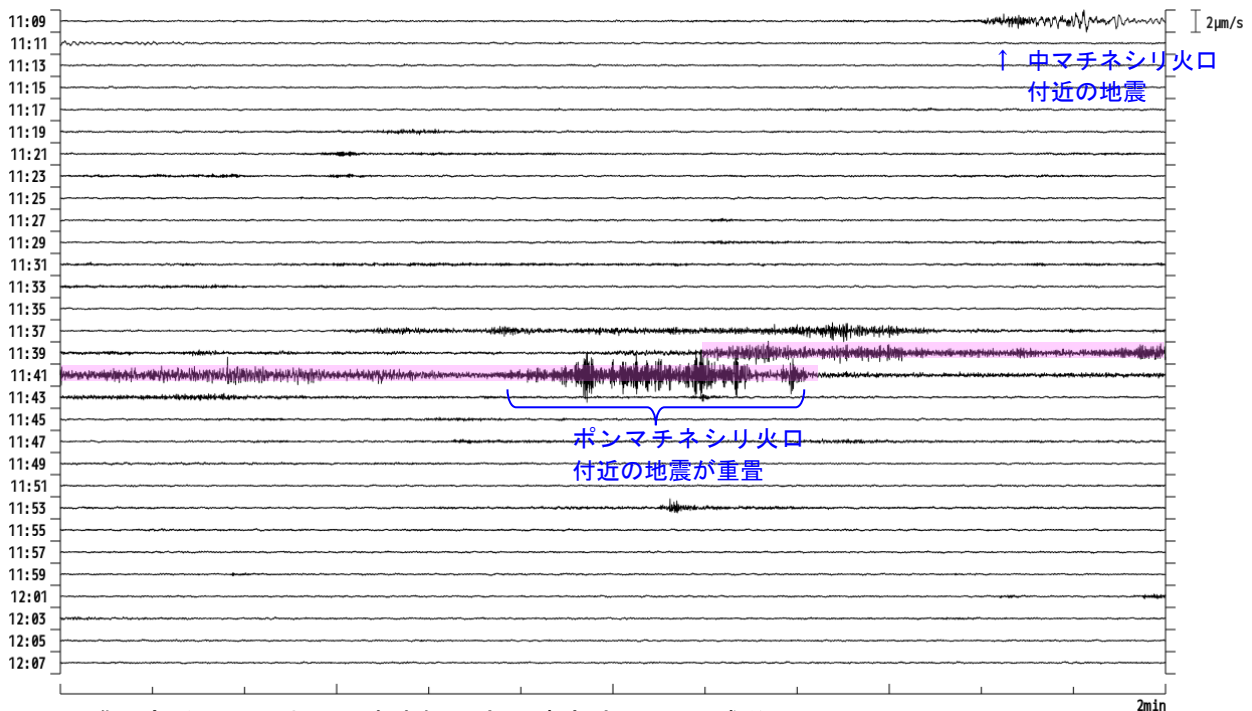


図4 雌阿寒岳 オンネットー南東観測点の速度波形 上下成分
(29日11時09分～12時09分)

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

- ・29日11時40分頃からポンマチネシリ火口付近で振幅が小さく継続時間が約2分間の火山性微動が発生しました。
- ・この火山性微動に伴い火山性地震も観測されましたが、微動の前後で地震活動の状況に特段の変化は認められませんでした。

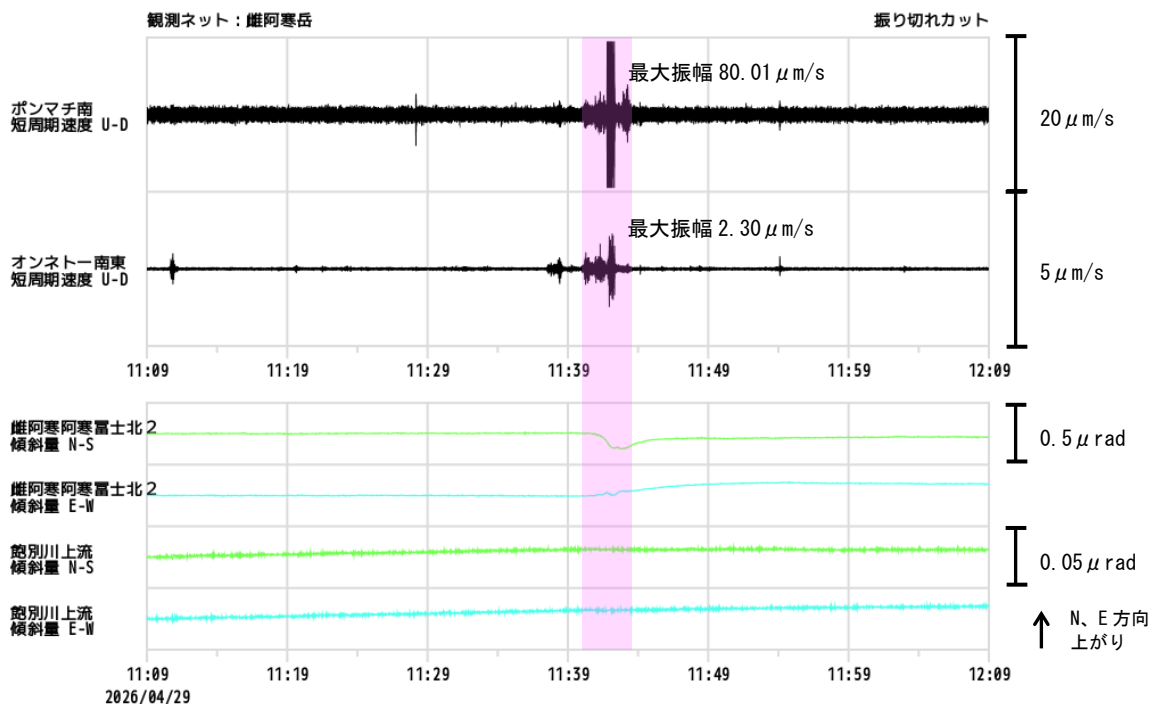


図5 雌阿寒岳 29日11時40分頃に発生した火山性微動、火山性地震と傾斜変動
(29日11時09分～12時09分)

各地震波形は100Hzデータ、傾斜波形は1Hz（秒値）データの推移です。

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

- ・29日11時40分頃からの火山性微動及び火山性地震に伴い、ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2傾斜計でわずかな傾斜変動を観測しました。

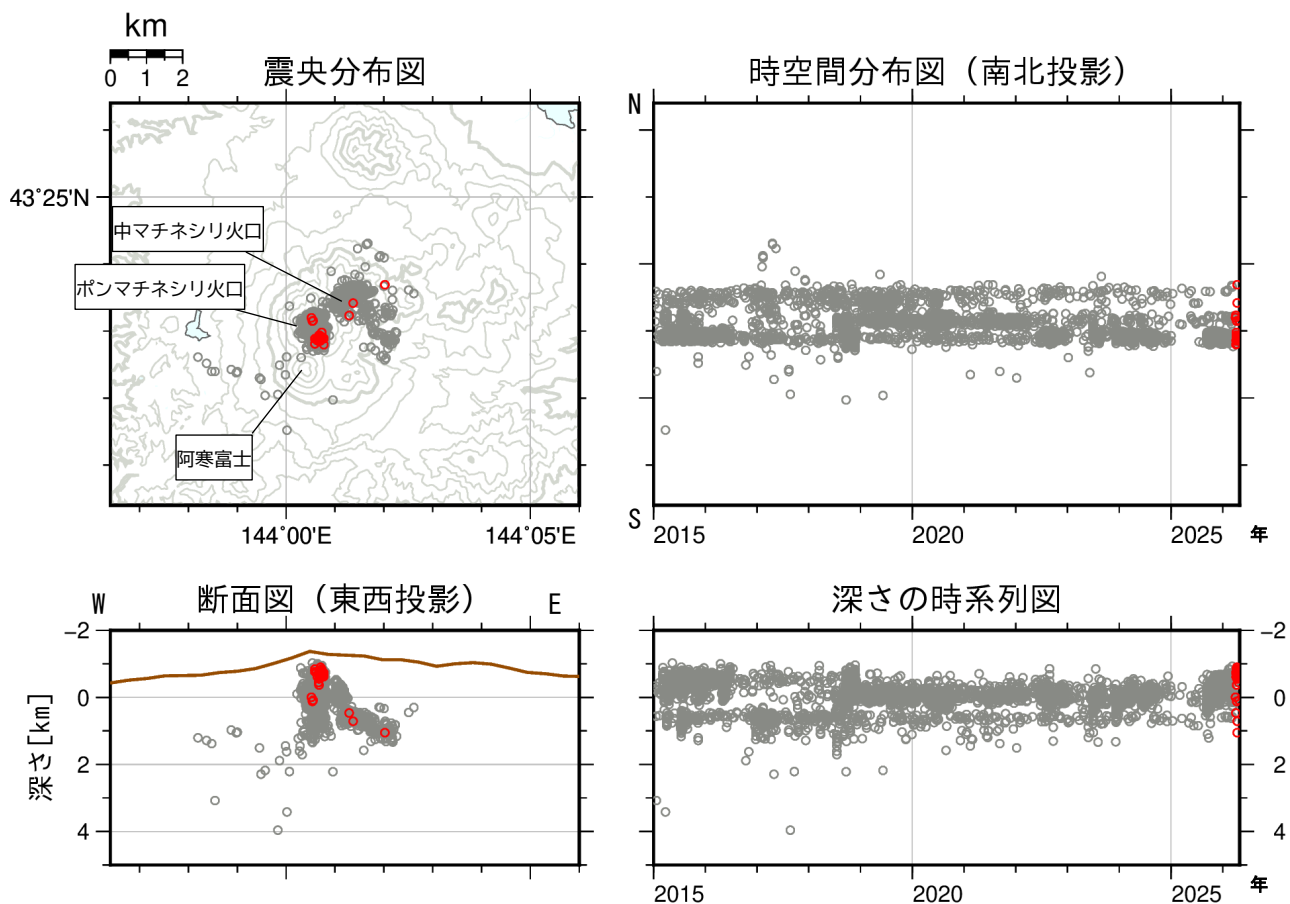


図6 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年4月）
 ○：2015年1月～2026年3月の震源 ○：2026年4月の震源

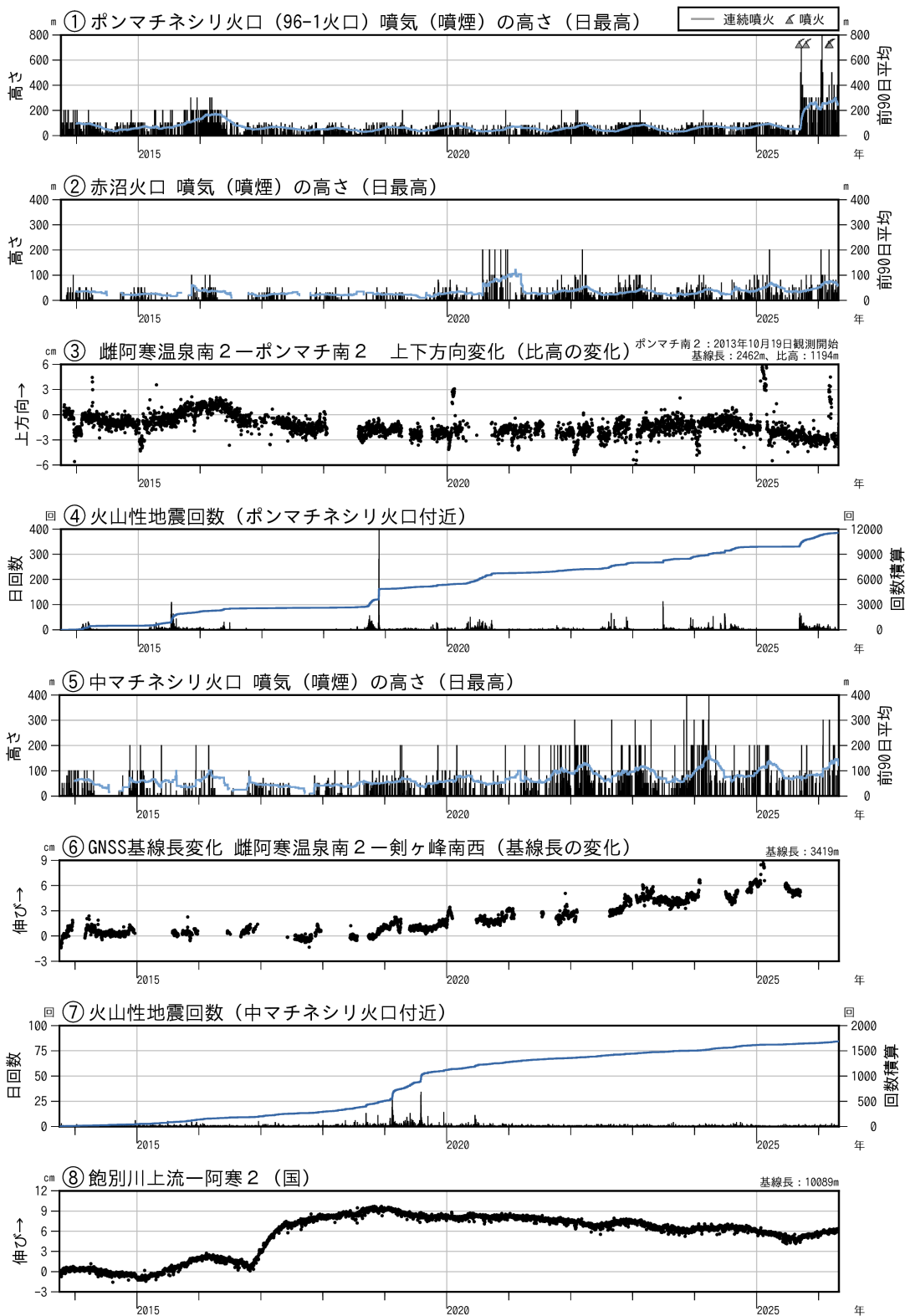


図7 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年4月）

- ・各火口の位置は図1を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図11）基線④、⑦、⑨に対応しています。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ポンマチネシリ火口付近の地震は、2025年9月に増加して以降、次第に回数が減少しています。また、96-1火口の噴煙の高さは、2025年9月12日以降、高い状態が続いています。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

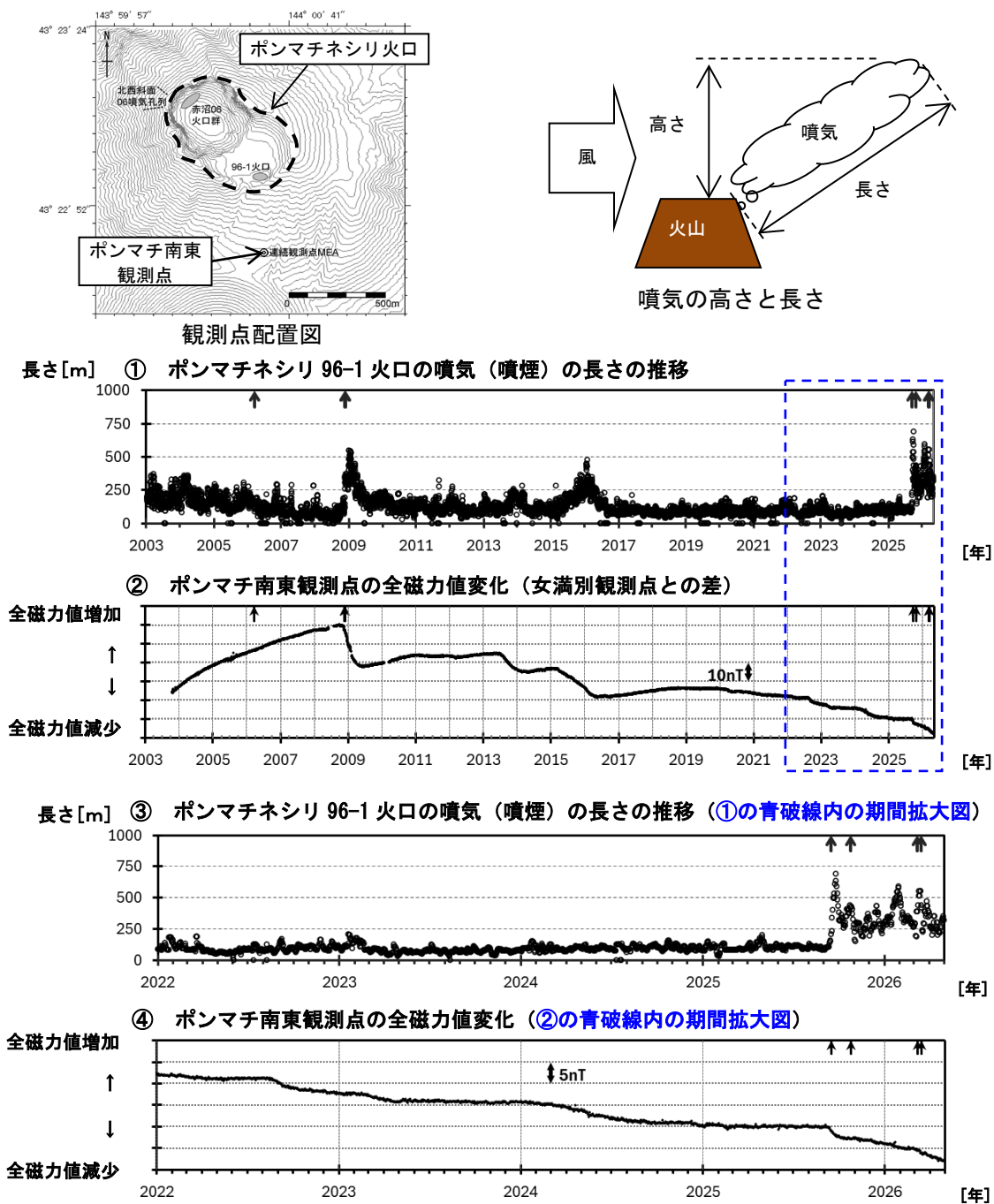


図8 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さや全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年4月）

- ・①③のグラフに示す噴気（噴煙）の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- ・図中の↑は噴火を示します。ただし、2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・96-1火口の噴煙の長さは2025年9月12日以降増大し、活発な状態が続く中で盛衰がみられています。
- ・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、10月以降も緩やかに継続しています。また、2月末から減少率にわずかな増大が認められます。中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

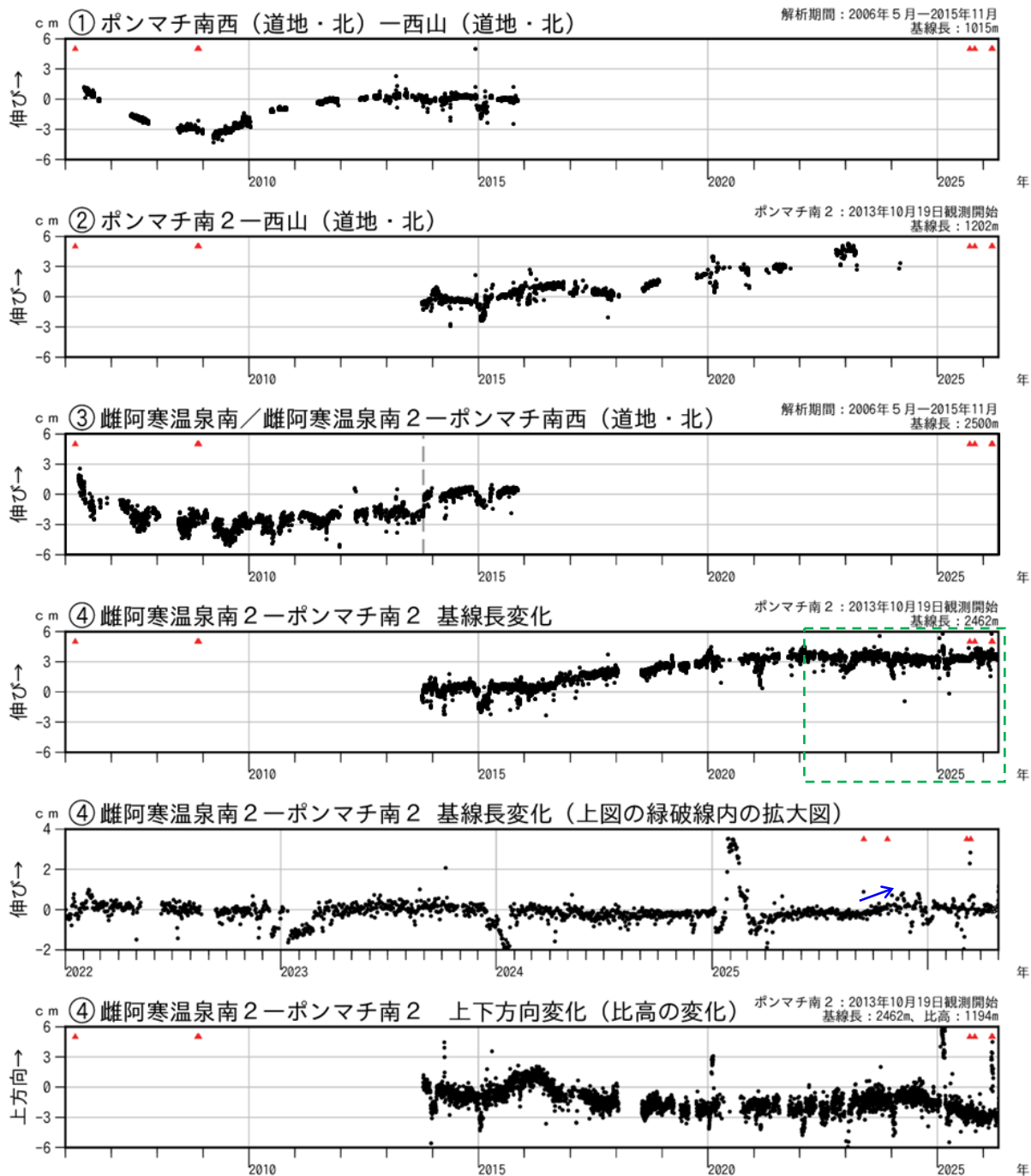


図9-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年4月）

- ・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図11）の基線①～④に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

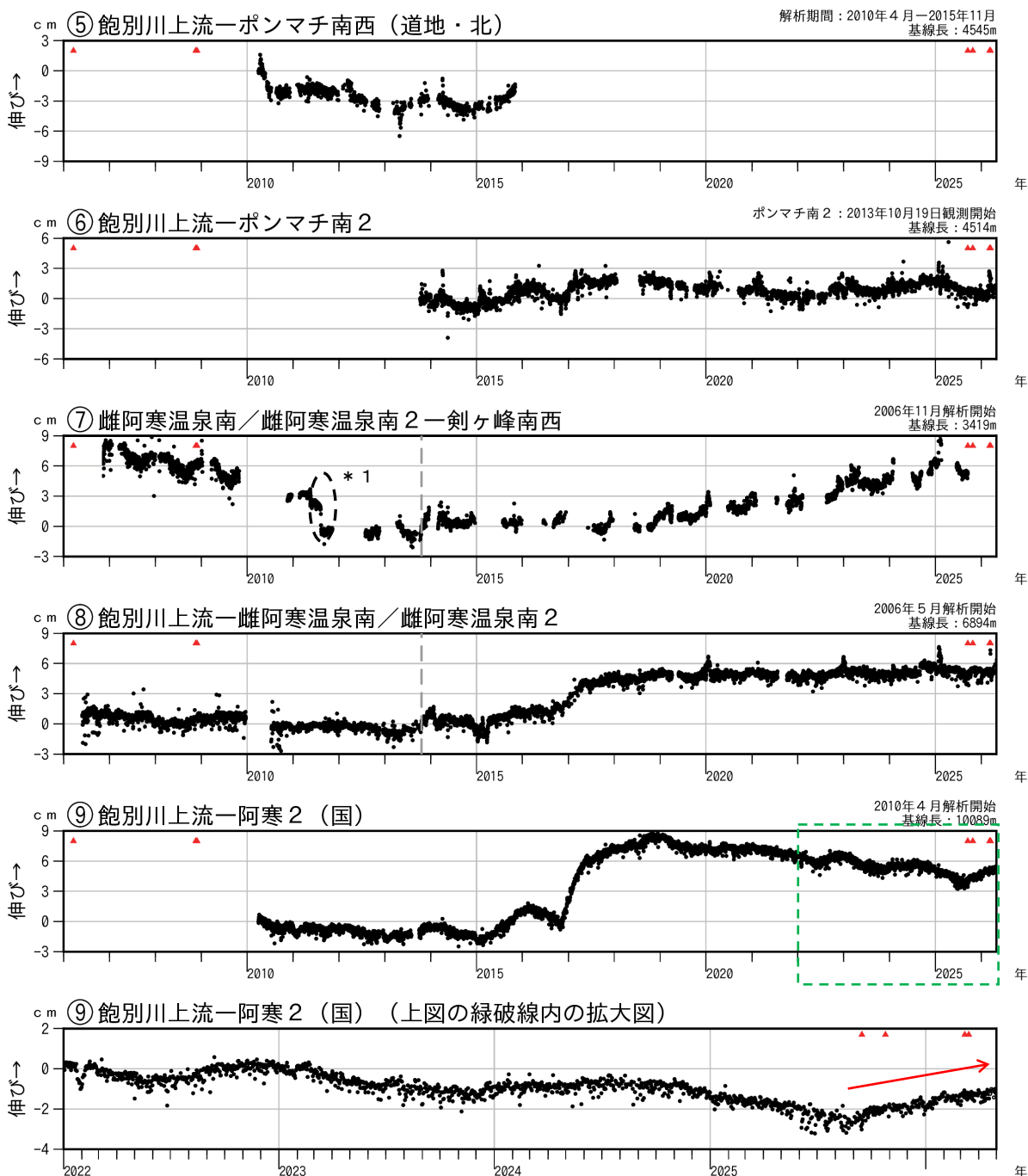


図9-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年4月）

- ・ グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図11）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ * 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・ 南東及び北東山麓の観測点を含む組み合わせの基線⑨では、2025年8月末以降、伸長傾向（赤矢印）が認められます。
- ・ 基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

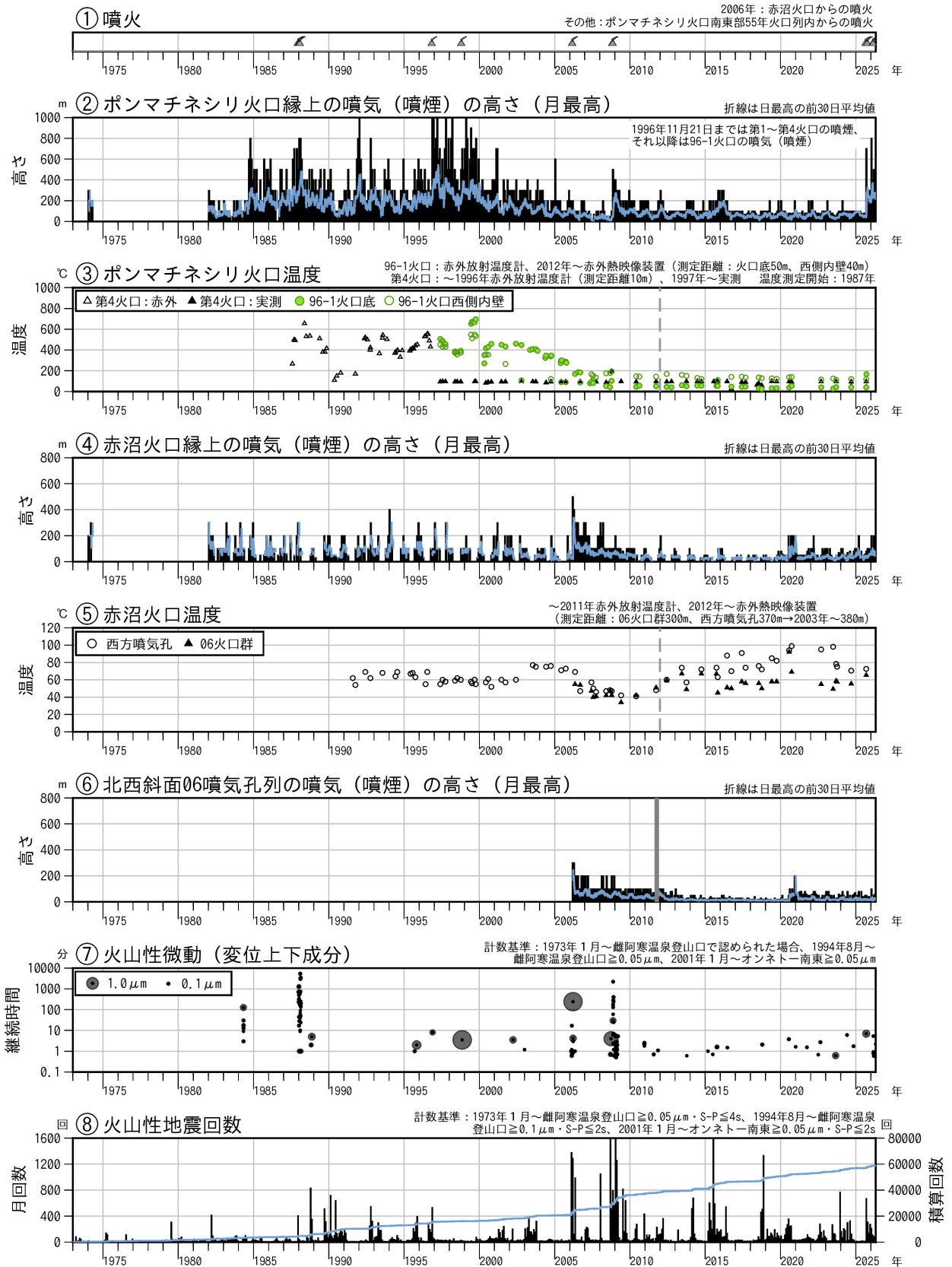


図10 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年4月）

- ・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・各火口の位置は図1を参照してください。

